

作品に残る情感の余韻 《名家寄書き》

野本淳

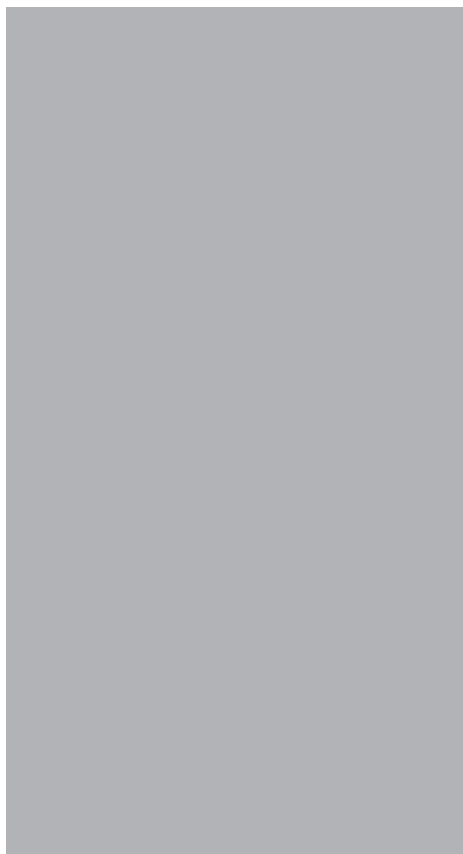
横山大観は、明治元年生まれである。そして今年はその生誕一五〇年にあたる。内閣官房が「明治一五〇年」関連施策を進めているなか、むしろ世間では昭和時代における日本画の巨匠としてのイメージが強いのではないかと思われる横山大観が「明治時代」とともにクローズアップされるのは、ただの元年繋がりではない。今回の展覧会では、明治時代の作品が多く出品されると聞く。個人的には、明治三十年代から大正前半に制作された作品に強く惹かれるので、明治時代の作品展示が充実されるのは嬉しいし、久しぶりに目にする作品もあるので楽しみである。

展覧会に行くと、ふとどうして、この絵を描くことになったのだろうかと妙に気になる作品がときにある。例えば、画中に何か書き込みがあれば、どんな内容が記されているのか、読めない字を読もうとする。もちろん、わからずじまいのことだって多いのだが、その作品に帰着した画家の行動を想像すると、作品が生きた手の痕跡として見えてくるのだ。作品は美術としての鑑賞対象ではあるのだが、画家を知るための窓であるとも思う。大観は「画は人なり」と作品本位を高らかに謳ったが、私にとっては画家を知ることが作品の魅力を感じる手立てとも思える。

私が明治時代の大観の作品に惹かれるのには訳がある。それは、書簡、新聞記事、その他の記載を繋ぎ合わせて、大観がとった行動の足跡をまばらながらも知ったからである。封筒の記載、消印を確かめながら大観の書簡を読むたびに、筆まめだなと感心し、当時の、離れた相手と意思疎通をすることの労力を思うと、現在の、時間場所に関係なく連絡がとれる通信技術の便利さと味気無さを知り、彼らの美術への熱意、必死さをひしひしと感じるのだ。

本展覧会に出品の《名家寄書き》も、気になる作品である。横山大観、菱田春草、西郷孤月、寺崎廣業の四人の寄書きで、これに巖谷一六の画賛と、依頼者と依頼の経緯が認められている。これによると、天保期前後を生きた北蒲原郡濁川村(現・新潟市北区濁川)の豪農・近藤甚助は書画詩歌を好む趣味人で、名家の彫刻による印章を集めたが、その曾孫にあたる近藤某が曾祖父を追慕し後代に譲るべく、甚助が遺した印章を捺し現代名家の画賛等を依頼したものだ、という。印影を花に見立てて花籠とし、香りに誘われて舞う蝶、うたた寝をする猫、そして印章と団扇を描き合わせたものである。依頼主をはじめ四人の画家がどんな経緯で集って描いたものなのか、と気になる。書の世界では、現在でもパフォーマンス的に観覧者がいる前で制作することがあるが、現代日本画ではそうした話題を聞くことは少なくなった。しかし、日本画においてもかつては書画会、揮毫会などと称してその場で作品を制作することもよく行われていたし、宴会の席で描かれることもたびたびあった。では、この合作はどうなのか。

濁川村のある新潟県と大観との関係があらわれるのは、明治三十三年十月中旬に開催された日本美術院の新潟美術展覧会からである。開催に先立つ九月、展覧会事務所の立上げに続き岡倉天心が新潟に赴き、これに大観と春草が同道した。天心は講演会の後すぐに帰京し、大観らも次の用務のため松本市へと向った。現地で事務所を担当したのは寺崎廣業と永井一禾であるが、実際には一禾が主であつたらう。新聞記事からは多くの素封家から賛助金を集めた様子がかがえるが、賛助者のなかに「濁川村 近藤啓之助」



横山大観、菱田春草、寺崎廣業、西郷孤月
《名家寄書き》1901年 公益財団法人 二階堂美術館蔵

という、この合作の依頼者である近藤家の係累と推測できる人物の名も確認することができる。

翌三十四年、大観と春草は再び連れ立って新潟入りを果たす。今度は各所から作品を集めて開催する絵画展覧会への参加のためである。前年の展覧会は美術院の地方巡回展であったが、この展覧会は日本美術協会や日本画会員等が参加しての開催で、美術院は団体としての公式参加を否定した。大観らは、いわば個人参加といったところであろうか。この展覧会は、前年に美術院の賛助金集めに奔走した永井一禾も関わっており、二人が一禾の自宅に滞在していることから、その参加が彼のお膳立てによるものとうかがえる。このとき、展覧会とは別に大書画会なるものが開催されているが、その参加者として、巖谷一六、寺崎廣業の名があげられている。

さて、こうした寄書がどのように描かれたのか、様子がうかがえる新聞記事がある。新潟の東北日報、八月二十七日の記事である。

○舟遊雅樂

一昨二十六日既望前二日蘇子客と舟を浮ぶるでなくて信川舟遊の同行者は巖谷一六翁を筆頭として寺崎廣業、横山大観、永井一禾、菱田春草、新潟新聞の岩崎、新潟日報の猪俣、神林、巴、及本社の孤筈等無慮十數名午後六時より白山浦、浦嶋屋より船を漕ぎ流れに従ふて下りしは月白く風清く白露江に横はるの良夜なりし、杯を侑むるの佳妓何れも興に入りて追分とやらを歌ふや一六翁先づ筆を染めて

乙女子のかんばる聲や涼舟

と郭隗首唱の功を奏すれば一禾は取敢へず

夏の夜や浮れ、て涼舟

と即吟せり孤筈は一六翁の無髯なれば『中有無髯坡老仙』との一句を書して翁に聯句を求めけるに翁は筆を執て扇子に一小舟をき題して云ふ

明月清風白露天。舉杯同泛美人船。當年赤補新畫。中有無髯坡老仙。

と廣業は千尺の斷崖を大観は最も小なる月を一禾は萬頃の烟波を春草は蘆荻を何れもビールを硯池に滴たらしめて之れを書き茲に一幅赤壁の好畫圖を作し得たり船、萬代橋下に至るの時驟雨沛然盆を傾けしかば何れも車を驅つて歸路に就きしは午後十一時なりき

芸妓を伴つての舟での酒宴で、巖谷一六が扇面に小舟を描きつつ吟じた詩に合わせ、廣業が斷崖を、大観は月を、一禾が霧の立ちこめる水面を描き、春草が蘆と荻を水辺

に加え、舟遊びを赤壁賦に見立てて赤壁の図を合作したというのである。

ここで《名家寄書》に見る五人のうち四人の行動が重なった。この作品も同じ滞滞時のものなのであろうか。ただ、西郷孤月だけ名が見つかからない。実はこのとき、孤月はまだ九州に居た。大観、春草が新潟に来遊する直前まで孤月は二人と一緒に博多に滞在しともに揮毫に勤しんでいた。大観らは九州から新潟に赴いたが、孤月はそのまま博多に残り、九月五日になって美術院の地方巡回展が開催される和歌山方面へ向かったと九州日報九月六日は伝える。このとき、すでに大観と春草は新潟から去っている。

この信濃川での舟遊びの一カ月後、下村観山と寺崎廣業が日本美術院正員のまま、東京美術学校の教授に復職した。東京美術学校と袂を分かち、日本美術院と生死をともにすると誓った大観は、これをどう思ったのだろう。齋藤隆三は、日本美術院史のなかで「一意美術院に奉じ熱烈天心の指針に従って邁進を続けて来た大観と春草には、こゝに際して人一倍の不満も悲哀も感じたものであろう。秋の共進会には出品せず、放浪の旅を新潟から北海道に取った」と記している。同年十一月、また大観と春草は新潟に滞在したが、ここに廣業、孤月が同席する可能性は考えられるのだろうか。

当時、大観は体調の悪かった妻・文をその故郷である群馬県の兄宅に娘とともに預けていた。そんななか、春草とともに長く地方を漫遊して揮毫を重ねていたのである。この時期、こうした合作が数多く描かれたに違いない。日本美術院や東京美術学校、複雑な思惑と心情が交錯するなかで地方の素封家たちに歓迎され、作画を重ねていた大観。この合作から、複雑に絡み合った人間関係が作品の背景にあるのを感じるが、すつきりとは解さほぐせないもどかしさよりも、当時は精一杯生きる画家の姿が見えてくるようで、想像ばかりが脹らんでいく。

(高崎市タワー美術館 次長)

後記 横山大観と菱田春草はいつも一緒に行動していたので、若かりし頃の大観のことは若かりし頃の春草のことでもあります。春草の地元、長野県飯田で春草の研究にたずさわってこられた小島淳氏と、かつて横山大観記念館に在籍し、地方紙を丹念に調査して大観の行動を追った論考を発表された野本淳氏に、今回は執筆をお願いしました。いわゆる「朦朧体」の時期の大観たちの行動を、一方は書簡、他方は作品を鍵に読み解いてくださいました。

(美術課主任研究員 鶴見香織)